
満月の夜から

城戸龍騎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

満月の夜から

【Nコード】

N4994BA

【作者名】

城戸龍騎

【あらすじ】

東方永夜抄、風神録、地霊殿の二次創作です。妹紅といろんな人達の物語。

満月の夜（前書き）

初投稿です。

読みづらかったらすみません…。

満月の夜

とある冬の日。空には綺麗な満月が浮かんでいた。これまで自分は何度満月を見てきたのだろうか。白髪の少女・藤原妹紅（ふじわら）の（もこう）はふと考えていた。彼女がいるのは、幻想郷にある迷いの竹林だ。その名の通り、よくこの竹林では人が迷う事が多い。そんな人達を、竹林に住んでいる妹紅が案内する――。いつの間にか、毎日の事となっていた。

妹紅はある屋台にいる。この屋台には、八目鰻やつめうなぎの串揚げや、冬にはおでんがあつたりする。

「いやー寒くて困っちゃうわね。歌もよく歌えないし。あゝのど飴が恋しい。」

話しているのは、この屋台を切り盛りしている夜雀の妖怪、ミスティア・ローレライだ。「そうだな。まあ、私は自分で炎出せるからいいけどね。」

妹紅は不老不死であるのだが、それとはまた別に、炎の妖術を扱うちなみに、ミスティアは歌で人を惑わせたり、人の視力を低下させる鳥目にする事が可能だ。

「こつやって飯を食べないと慧音のヤツがうるさいんだ。いくら不死だからってちゃんと栄養をとらないのはダメだーって。まったく……。」

「でも、妹紅らしいね。」

「……焼き鳥にすつぞ。」

「ええええ！？ちよつ、ちよつとそれだけはっ……！」

「冗談だよ。冗談も通じないような鳥頭なのか。」

「冗談にしちゃあ重すぎ……！」

彼女は、満月の夜になると白沢という妖怪に変身する。妹紅にとって一番の理解者だ。

「まあ、こつやって竹林の中で親切に屋台開いてくれるのもありが

たいし、慧音みたいに心配してくれるのもありがたいし。結構幸せだな、私。」

「何しんみりしちゃってんの。」

「いいじゃないの。たまにはさ。」

八目鰻の串揚げをほおばりながら妹紅は言う。

「よおーっし、私も歌おうかなー？」

「お、いいぞー！」

ミスティアが歌おうとしたその時だった。

突然妹紅の背後に向かって、何かが飛んできた。

「おいしそうなにおいーっ！っ！」

「な、なんだ！？」

「うわーっ！」

飛んできたのは、大きな黒い翼を持ち、長身で髪は長く、胸には赤い目のような物がついており、人間ではなさそうだった。

「ごはんーっ！」

「か、鴉…？」

妹紅が呟く。

「あ、私、霊鳥路空！よろしく！じゃ、いただきまーす」

「待て！！ミスティアを食べようとするな！」

「ひええー！！！」

今回は冗談ではない。

「え、鶏肉じゃないの？」

「いや、鳥だけだね…生きてるから！」まったく、鳥の妖怪は鳥目ばっかりだ…と妹紅は呆れていた。

「ところでさ、妖怪の山から来たみたいだけど、どうやって？」

「びゅーんって。」

「…あんた、妖怪の山に住む妖怪なのか？」

「ううん、地霊殿だよ。」

「なんだそりゃ？」

「えっとねー私が住んでるところだよ。」

「そう言われてもだな…。」なんだ、このバカカラスは…と妹紅は再び呆れる。

そんな時、何かが向かって来る音がした。緑色の服を着ており、頭からは二本のツノが生えていた。

「け、慧音!？」

通常なら青い服で、変わった帽子をかぶっているのだが、今日は満月の夜。獣人に変身しているようだ。

「お前かー! 私の作業を邪魔するのはーっ!」

「うゝにゅあつ!？」

慧音の頭突きが空に炸裂した。空は竹林とは真逆の場所にある妖怪の山へ飛んでいった。

「全く…満月の夜は気が立っているというのに…。さっきのは地底の鴉か。」

「慧音知ってるのか？」

「まあな。核融合の力を持つ、大きくてバカな鴉がいます。あの守矢の連中は何をしているのだから。現人神もあまり良い印象は持たなかったからな…。」

「…そうか。後で行ってみようかな。守矢神社。」

「…」

慧音は何か言おうとしていたが、その後のミステリアの言葉でかき消された。

「慧音も食べていきなよ、八目鰻の串揚げ!」

「あ、すまない…ありがとう。」

ミステリアの歌を聴きながら、妹紅と慧音は地霊殿について話していた。

「地霊殿って言ってたな。そこってどんな所なの?」妹紅がたずねる。

「妖怪の山にある穴から地底に入った後、奥深くに建物がある。その建物を地霊殿というそうだ。元々は地獄だったらしいな。そこには、多くの怨霊がいたり、灼熱地獄の跡がある。どうやらその主

が、ペットをたくさん飼っている為、地霊殿の様々な所を管理させているのだろう。あの鴉もペットの1人だろうな。」

「ふーん…やけに詳しいな。まあ、慧音だし…」

「これでもまだまだだ。」

「やっぱり慧音はすごいな…。にしても、ちゃんとしつけてんのか？その主は。ペットがいきなり飛んできたし。」

「…確かにな。…そうだ、妹紅。お前は強いから心配する事はなさそうだが…。守矢神社は妖怪の山にある。妖怪の山には強敵もたくさんいるからな。十分に気をつける。」

心配そうな声で、慧音は忠告する。

「…そうだなあ。でも、大丈夫だよ。私死なないし、それに目的は2つある。何としてでも行かなければならない。」

妹紅の目は真っ直ぐだった。これからの試練を見据える目。

「そうか。もし、向かうときは私に一声かけてくれ。」

「ああ、分かった。」

「では、作業に戻るとするか。またな、妹紅、ミスティア。」

「じゃあな。」

「バイバーイ！」

慧音は人間の里へ帰って行つた。

夜はまだ明けない。

迷いの竹林では夜雀の妖怪の歌声が響いていた。

満月の夜（後書き）

できれば、感想お願いします。
2話執筆中です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4994ba/>

満月の夜から

2012年1月13日21時47分発行